

「皆揃ふて、横根やと思ふたら洒落やつた」

「モン定はん、喜いさんの言ふてる事を聞いてると腹が立ちます、貴郎なんぞ思惑がおまへんか」

「そら無い事はおまへん、此間からチヨツと考へた事が有ますね、こゝで芝居を一幕仕組まんねなア」  
「芝居を仕組と言ひますと」

「兄弟の順禮が仇討に出て居ます、櫻の宮で一服して居ますと、其處へ深網笠の浪人者が其の火を借りに來ます、互に顔を見合せて吃驚して名乗合ひ、長い刀を抜いて斬合ふ處へ六部が仲裁に這入り此勝負修行者に御任せ下されと、双方が別れると、六部の笈櫃をおろして中から毛氈が出る酒肴が出る、皆が酒を飲んで後で三味線を弾いて騒ぐ、正眞やと思ふて居たら、あら洒落やつた、と如何だす」

「サア、是や依つてに定はん處へ來ないかん、然し定はん、役者はこれたりまつか」

「へエ、大抵いけると思ひます」

「役割は如何になります」

「左様だんな、寅はんと喜いさんは背恰好が宜う似てますさかひに兄弟の順禮、松さんは躰が大きいので百日鬘が宜う似合ひますさかひに、敵持ちの浪人で、私いが仲裁の六部を」

「定はん私いは何役だす」

「今、言ふてます、兄弟の順禮、弟の方だす」

「役者なら、誰が役所ます」

「マア、葉村屋か、河内屋だんな」

「女が惚れますか」

「娘はんが、ベタ惚だすせ」

「貴郎の役は」

「仲裁の六部だす」

「役者は」

「マア、伊丹屋か、或は高砂屋と言ふ處だす」

「娘が惚れますか」

「マア、後家はん、年増だんな」

「ほんなら、私い年増の惚れる方が好きや」

「六部は笈櫃を負わんなりまへんで」

「ほんなら娘はんで辛抱しときます」

「定はん、臺詞は如何になります」